創立六拾周年記念誌

東京都立小山台高等学校

S59(1984) 3/30 発行

昭和6年度（一九三一）

学校行事

4・3　入学式
4・22　御真影奉拝式
4・23　五年上野池端化学工業博覧会見学
4・24　一年野外教練　四年工業博覧会見学
4・28　二年野外教練
5・11　五年修学旅行（～16日）
5・14　見学会　一年園芸学校　二年赤十字参考館・鉄道博物館　三年動物園
6・1　四年測図演習
6・3　遠足　一年大磯　二年江ノ島・鎌倉　三年筑波山　四年金沢・逗子　五年貴衆両院・大審院見学
6・30　午後武道大会
7・20　四年駒沢練兵場で教練
9・5　終業式
10・9　水泳大会
10・15　四年野外教練で駒沢練兵場に露営
10・16　三・四・五年学芸会
10・22　一・二年学芸会
11・1　全校遠足
11・3　運動会
12・22　満州派遣軍慰問金二百円を陸軍省恤兵部に寄贈
1・13　教練査閲施行
3・8　一年満州事変展覧会見学
　　第五回卒業式

陸上競技部の活躍

佐藤　正

昭和六年春に、当時の明治神宮外苑で、関東中等学校陸上競技選手権大会というのがあった。小生が、走巾跳で六米五九で優勝、四〇〇リレー（保木、安達、土岐、佐藤）で決勝五位で入賞した。八中競技部の公式試合記録は、これが、はじめてであろう。秋の全国大会では、走巾跳六位で終わった。

秋に、当時の府立園芸学校と対抗試合があった。当日の記念写真をみると、借り集めの部員ではあったが、五年生一四名、四年生六名、三年生四名の顔がみえる。先輩の方々の谷口現吉氏、故若宮小太郎氏外一一名の懐かしい顔がある。昭和五年の競技部の卒業記念写真には五年生二、四年生六、三年生二の計一〇名であった。

当時の練習といえば、昼休みに、旧体育館裏（学校敷地の東北隅）の洗面場、鉄棒砂場のあった狭い空地で、そこで走高跳びや棒高跳びで遊んでいた程度であった。校庭は、砂利が敷かれていて、スパイクをはくと、すぐに針が曲がってしまった。

当時慶応大学で山岳部で活躍されていた谷口先輩（一回生）が、毎週一、二回は必ずわれわれが部室と称していた物置小屋に来られて「練習をやっているか」と顔を見せられた。先輩が来られるからといって仲間を呼び集めたことも懐かしい思い出である。先輩が来られなかったら、競技部もこれまで育たなかったであろうとつくづくと思う。

（中5回・昭7年卒　東京学芸大学名誉教授）

当時の八中陸上最高記録

（校友会雑誌8号より）

種目	氏名	記録
100米	佐藤	11秒6
200米	佐藤	23秒6
400米	星野	59秒2
800米	富永	2分26秒2
400継走	保木・安達・土岐・佐藤	46秒6
800継走	阿部・藤尾・星野・佐藤	1分47秒1
走巾跳	佐藤	6米59
棒高跳	保木・若宮	2米95A
走高跳	杉本	1米60
三段跳	佐藤	13米07
砲丸投	佐藤	11米31

ゴッド

鎌田栄一

初代岡田校長先生の思い出が数多く語られて居りますが、大田区馬込に居られた、元高等小学校校長先生だった故河原先生から、直接お聞きしたお話しです。

昭和28年度（一九五三）

学校行事

4・10　創立三〇周年記念事業として講堂完成
5・13　第八回オケラ杯争奪校内弁論大会
6・12　図書館整備完了（中学校五回卒業生米田誠一氏、閲覧机・椅子を寄贈）
10・24　創立三〇周年記念式典挙行
3・1　合同選抜学力検査（～2日）
3・6　高等学校第六回卒業式　優等・皆勤賞廃止さる
3・31　校長岩本実次郎　依願退職

世相

5　内灘軍事基地反対闘争激化
7・27　朝鮮休戦協定調印

流行語――洗脳・八頭身・サイザンス
流行歌――芸者ワルツ・五木の子守唄

インターハイの思い出

大橋　勲

二八年八月一五～一六日、第六回全国高校陸上競技選手権大会は、横浜三ッ沢競技場で雨中の大会となった。

その前年、松本での第五回全国大会には、大日向・早川・秋山・佐分利の諸兄と八〇〇米リレーに出場、準決勝で涙を飲んだ。

今年こそはと練習に励んだ結果、六月の東京大会で、一〇〇米は一一秒三で三位、二〇〇米に二三秒四で優勝し、熊本水前寺競技場での、第六回全国大会への出場権を得た。

もし、三位までに入賞した時のためにと、表彰式用の部旗を作り大会を待った。

しかし、七月中旬、熊本地方を襲った集中豪雨による水害で、水前寺での開催は不能となり、予定より二週遅れ、横浜に変更となった。大会延期による調整に苦しみつつ、桜木町近くの宿舎、紅葉閣に入ると、東京選手団男子は、大広間での雑魚寝で、寝つけぬ一夜を過ごす羽目となり、榎木先生、望木先輩に大変な気を遣わせた。

結果は、一〇〇米は予選、二〇〇米は準決勝で共に四位となり、決勝に進めず、折角の部旗も出番は無かった。

二六年から三〇年の第二期黄金時代、この時の競技生活仲間が、今でも気の許せる友達であり、まさに我が青春に悔い無しである。

（高6回・昭29年卒　住友商事㈱繊維本部参事）

第八回オケラ杯弁論大会

秋山範子

今から三〇年程前、新制の男女共学が発足して三年目に小山台に入学した。前年には約百名の女子が入学していたが男子生徒にはものめずらしかったと思う。そこでオケラ杯弁論大会に私の選んだ題も「男女共学について」であった。オケラというのは漢文担当で弁論班の顧問だった舞田先生のことである。

原稿は自分で考えたが父に随分手伝ってもらったように思う。大会の前日まで、屋上の八角塔の裏で練習した。大体が早口の私はともすると一本調子で早口になりがちなのを、ゆっくり判りやすく話すのに時間がかかった。当日は十何人かの男子に混って、女子はほんの二、三人でものめずらしさも手伝ってか、確か三位迄に入賞したと思う。それを機会に弁論班にも入って多くの先輩達の教えを受けたことも今ではなつかしい想い出である。

（高6回・昭29年卒）

担任一覧	学年／組	1	2	3
	A	大伴	舞田	杉村
	B	坂井	落合	不島
	C	塩野入	武田	深堀
	D	栗原	薗頭	松永
	E	竹内	井沢	青木
	F	鈴木	三橋	°大岩
	G	奥野	園山	宮田
	H	榎木	勢山	野々山

ぬ」のバトラーとアシュレを比べあったり、アン・ブックスに興じていた。

中学の校長であった父親は教師への道を望んだが、駆けっこの指導なんて出来ないよという娘を不びんがり、文部省図書館職員養成所（現在図書館情報大）への入学を勧めた。

本の虫で夢想家の少女が、"本と読者を結び"仕事をするようになった最初の一歩は、逃げこんだあのプール際の図書室で過した日々から始まっていたといえよう。だから私にはあの場所が一番懐かしい。

（高7回・昭30年卒　品川区立ゆたか図書館々長）

当時の運動会

榎木繁男

運動会は、生徒会の最大の行事で、体育委員と生徒代表の応援団長・副団長で行うようになったのは昭和二六年頃と記憶しています。運動会は生徒の手でやるべきで、当日先生は表面に出ないで、できるならば体育科の先生も背広を着て職員のテントの中で見物しようというのが我々の目標でした。そのためには、当日までの準備にはどんな努力もおしまないという姿勢で取り組みましたから、三五年頃までは、各団の種目練習が終わって下校時間後毎日遅くまで、団長・副団長を中心に、ルールの検討や運営の打合せの会議をしたものです。

運動会の種目もこの頃検討して残った大部分のものが今に引き継がれています。

団長をやっていると受験に影響するというので団長のなりてがなく苦労した時代があったが、三八年かに、青組が最後のリレーで劇的な逆転優勝をしたのをきっかけに団長の希望者がふえたのを憶えています。当時の団長達は、生徒を代表するリーダーばかりで、社会人になっても立派にリーダーシップをとって活躍している人達ばかりでしたので、三年生も積極的に協力し、運動会は益々充実したものになりました。

それも全校生徒が、自主性豊かな優秀な生徒だったので、我々の意図を十分理解してくれた結果だったと思います。

（旧体育科職員・産業能率大学教授）

昭和46年度（一九七一）

学校行事

4・8　入学式
4・12　火災報知機設置
5・14　私鉄・国鉄ストのため、生徒の登校に影響（18・20・21日）
6・16　合唱コンクール
6・25　前期生徒総会（28・29日に継続）
7・14　光化学スモッグの注意報・警報を告知板によって知らせることにきまる
7・27　クラブ合同合宿（～8月1日）
8・2　全国高校総合体育大会　四〇〇mで三位に入賞（二年渡部）
9・7　体育館雨もり改修工事竣工
9・8　水泳大会（～10日）
9・18　文化祭（～19日）
10・3　運動会（白組優勝）
10・26　笠松章氏講演会（三年）
11・8　二年修学旅行（～11日　京都・奈良方面）
11・30　校庭改修工事着工
1・3　スキー教室（～7日、12月末の予定だったが雪不足のため延期）
1・24　後期生徒総会「制服廃止案（却下）」などを討議
1・29　ロードレース大会
2・8　卒業記念品として、時計台の時計・ウォータークーラーを取り付ける
2　旧館三階に救助装置二個設置
2・22　入試選抜学力検査のため休校

I・H四〇〇M三位に入賞して

渡部　誠

八月二日、快晴。五時起床、暑くなりそうだ。七時四〇分、宿舎を出て競技場へ歩いて一五分。八時一〇分、ウォーミング・アップ開始。一〇時一〇分、予選七組に出場し二着で通過。タイムは五一秒〇。二〇番目ぐらいのタイムである。一一時四〇分、準決勝一組、予選が終わってから休息の時間も短い。なんとなく体が重い。スタート付近でボーッとしていると、「コーナーまで走ってこい」という岡野先生の声。走ったあとで目ざめ、気合が入った。三着でゴール。各組二着と上位二名が決勝へ進出できる。自信はあったが不安は残る。やっとプラスで拾われた。

そして決勝、コースは二コース。準決勝でただ一人四九秒台で走っているY君は四コース。準決勝の記録からすると四九秒台は一人だけであり、だれが優勝してもおかしくない。四時四〇分、スタート。前半からとばした、第四コーナー、ではトップに立っている……四コースのY君がゴール前四〇メートルで出てきた……結果は三位。とにかく全力を投入した。暑さとの戦いであり、三位に入れたのはとてもラッキーであった。

ここまで応援に来て下さった伊藤太一郎校長、前願間の榎木先生、班長の田中君、そしてOBの方々、東京で応援してくれている仲間たち、わざわざゴザを競技場まで運んでくれた民宿のおじさん、おばさん、ありがとう。この入賞は私だけの力ではなく、周囲の人たちの応援があったからだ。そして現在、私は日本女子体育大学に勤務し、陸上競技のコーチをしている。陸上競技は私にとって、かけがえのないものになっている。

（高25回・昭48年卒　日本女子体育短期大学講師）

文化祭の日の〝子供の国〟

加藤　真由美（旧姓　常安）

「あ、オヤマダイですか。よく知っています。」卒業以来、私の履歴書を見ながら、あるいは私の話に相槌を打ちながら、何度か、これに似た言葉を聞き、その都度、「コヤマダイなんです。」と訂正してきました。すると本当に御存知の方は、「運動会が有名でしたね。」などときて、つい、私も小山台には運動会しかないかのような話をバラまいてきました。でも、文化祭だってあったはず…。

何故、私が文化祭に拘っているか、その原因は先日届いた一通の手紙でした。それは、『文化祭について思い出し、八〇〇字以内にまとめよ』といった内容と、締切日まで指定された原稿依頼だったのです。「しまった！

昭和50年度（一九七五）

学校行事

4・1　文部省特定研究科学教育によりCAIの諸設備を貸与される
4・8　入学式
5・7　遠足（一年箱根　二年声が久保　三年馬頭山）
6・1　岡野進教諭　走巾跳び全日本選手権で第二位
6・4　ラグビー班・陸上班関東大会に出場の壮行会
6・13　合唱コンクール（三E優勝）
6・22　三B沼尻　関東大会で槍投げに優勝
6・26　生徒総会「評議会定数改正案（可決）」などを討議
7・19　陸上班全国大会へ出場の壮行会
7・20　合同合宿（今市・山中湖）
9・20　文化祭（～21日）
10・7　運動会（赤組優勝）
10・15　ブラスバンド班東京都吹奏楽コンクールで金賞受賞
11・10　二年修学旅行（～13日　奈良・京都方面）
11・14　一年講演会　講師NHK塚越恒爾氏（同窓生）
11・25　生徒総会「下校時の裏門開放案（保留）」などを討議
11・27　班目文雄校長　文部省より教育功労者表彰をうける
1・末　A東京七五型風邪大流行

槍投げの青春

沼尻百代

小山台……やはり私にとって、陸上生活抜きでは考えられない。あの土、あの匂い、よく走り、よく投げた。頭の中を槍投げでいっぱいにして、あの時を過ごせたことを本当にありがたく思う。この物質文明の世の中で、非生産的な事に打ち込める大切な青年期、私は思いきりやらせて頂いた。それができたのも、小山台のお陰である。小山台高校の存在そのものに感謝している。関東大会は、東京大会よりも記録面では悪かったが、インターハイ出場決定という私の夢を叶えさせてくれた大会だった。槍の穂先が青空の一点へ吸い込まれていく。何でもないような競技だが、心と体のすみずみの協力で生まれるその一瞬、筆舌につくし難い快感に包まれる。人間の可能性というものは限りない。それを限定した時、進歩は止まる。小山台高校の陸上生活で、可能性を信じて信念を持ち努力をすれば、その因が必ず果となって実を結ぶ、ということを学ばせてもらった。また、肉体訓練をする一方、精神の大切さをもつくづく感じさせられた。精神は肉体に先行するのであ る。そのことは、私の人生を歩んでいく上で、大変なプラスであり、真実の哲学である と思っている。

すばらしい経験をさせて頂いた大切な小山台高校の真の発展と、小山台生の心の生き生きと躍動する生活を願ってやみません。

ありがとうございました。

（高28回・昭51年卒）

思い出の構図

平沢和憲

修学旅行の思い出といっても、古都の印象や経験をそのままの形ではほとんど思い出せない。とりとめもない断片的な情景が、あるものはここ数年の記憶にすりかわって再現され、あるものは当時の写真の構図を借りて浮かび上ってくる。

私は修学旅行のグループ見学報告文集に、京都の朝の印象を記している。少々長くなるが、引用する。

第一声――雨かな

「雨かな？」と思った。ヒーターの音が雨だれに聞こえた。寝床を抜け出して窓ガラスごしに見おろすと道路が黒く濡れている。「やっぱり雨か」と、がっかりして目をあげると向かいの屋根瓦は少しも濡れていない。「あ、打ち水だ」と気づいて嬉しくなった。（中略）打たれた水は道だけでなくその上を行く人の心をもしっとりとさせるのだ。（後略）

昭和51年度（一九七六）

学校行事

4・1　東京都立紅葉川高等学校長斎藤義光本校校長に就任
4・8　入学式
5・12　遠足（一年石老山　二年高尾山　三年鎌倉）
5・24　校内競技大会（～26日　バスケット・バレーボールなど）
6・9　合唱コンクール（三A優勝）
6・13　陸上班南関東大会で活躍
6・24　生徒総会「生徒会費値上げ案（可決）」「ビニールバットボール使用案（可決）」などを討議
7・14　歌舞伎教室「平家女護島」鑑賞
7・20　合宿（山中湖・今市など各地）
8・1　陸上競技班・水泳班全国高校総合体育大会出場（～5日）
9・22　剣道班都剣道大会（敢闘賞）城南大会（優勝）などで活躍
9・23　文化祭（～25日）
10・10　運動会（赤組優勝）
10・22　一B高木・一D瀬川　全英連英作文コンテストで優秀賞受賞
11・9　二年修学旅行（～12日）
11・11　一年講演会「社会と学校」講師　船山夏雄氏（本校同窓生）
11・26　生徒総会「生徒会議事法改正案（可決）」「男子更衣室改善要求（可決）」などを討議

先輩のことば

桑山一也

「人間、苦しいと思ってから三倍はもつ！」入学から数日後の目黒不動からの帰り道でのことばである。行きは整列して、帰りは競い合ってのマラソンは、若き日の貴重な体験である。

私が剣道班員として、高校時代を充実したものとして過ごせたのも、この先輩のことばがあったからではないだろうか。剣道をしている時は、常にこれに励まされた。休みなく続く掛り稽古で、足の裏からしびれるような寒稽古で、くじけそうになる私の精神と肉体を、ようやく繋ぎとめてくれたのである。

そして竹刀を置いてからも、そのことばは自分の進みたい道への原動力として、何度となく私を励ましてくれた。運動会・大学入試・浪人生活・親友の死・大学生活・採用試験・就職……。その場その場で、必死になりそれを乗り越えようとして努力して来たのであるが、ここまでやって来れたのは、私が剣道班員としての意地を持ち続けることができたからかも知れない。いや、意地などという大それたものではなく、自然とそうせざるを得ない雰囲気とか空気とかいうものなのだろう。そしてそれは小山台の空気なのである。

私は小山台の空気を、剣道班を通じて吸って来た。空気はその味など意識していないが、生きる為には欠かせないものである。

「人間、苦しいと思ってから三倍はもつ！」何とも頼もしいことばである。

（高29回・昭52年卒　江戸川区立中小岩小学校教諭　言語障害学級担任）

合宿の思い出

菅原仙子

太陽がギラギラ照りつける中、一日中走らされる夏合宿は憂うつなものであった。「これをのりきれば強くなれる、夏の練習次第で新人戦は決まる。」先輩やOBは口をそろえて言ったものだ。

高一の初めての陸上班の合宿は山中湖であった。予定されていたはずのグラウンドが見つからず、初日は、少し小高い所にある荒地が練習場だった。がけ上りをさせられ、どろんこになったことを覚えている。また、ある日は砂浜での練習であった。忘れられないのが砂浜ダッシュ。二〇本、五〇メートルの加速走だ。砂に足が食い込まれながら走る。鉛をひきずるように足は重い。平地を走る倍の疲労感がある。しかも一本毎にタイムを測るため気をぬけない。一〇本目位をピークにタイムは低下の一途。あと何本…そればかりが

12・15　二年校内競技大会
12・16　一年校内競技大会
12・25　スキー教室（～29日）
1・8　「小山台通信」創刊
1・21　二E本間　スケート国体出場
1・29　ロードレース大会
2・2　書取大会
2・5　百人一首大会（一H優勝）
2・19　剣道大会（一A・二G優勝）
2・25　入学選抜のため休校
3・18　高等学校第二九回卒業式（卒業記念品天幕）

世　相

7・17　モントリオール五輪大会開催
11・10　天皇在位五〇年式典

流行語――記憶にございません・黒いピーナツ
流行歌――およげ！たいやきくん・横須賀ストーリー・北の宿から

担任一覧

組＼学年	1	2	3
A	°沢井	°柳原	°児玉
B	小林	三橋	安盛
C	野沢	象	多胡
D	竹内	田村	相沢
E	小山	藍沢	安藤
F	中村	岡野	細田
G	太田	若林	町田
H	江藤	岡	石井

頭の中をよぎる。ラストを走り終えた時の成就感はたまらなかったっけ。

このようなハードな練習が日中は続くが、夜は楽しかった。先輩、後輩の別なく和気あいあいでトランプに興じるのである。ナポレオン、大貧民…よく笑った。本当によく笑った。昼間の苦しさを忘れるひとときだった。

陸上…個人競技としてとらえられやすいが、一人ではなかなかできないスポーツである。仲間と共に励まし合い、批判し合う中でこそ練習が続けられるのである。苦しさと楽しさの共存した合宿は、特に仲間の大切さを感じさせられる時であった。

（高29回・昭52年卒　杉並区立済美養護学校教諭）

夏季合同合宿の思い出

多胡忠治

私が本校に来たころは夏季の合宿は合同ではなく、それぞれの班が単独で各地で合宿を行っていた。着任早々、ラグビー班について軽井沢に行ったこともあった。

その後合同合宿が行われるようになり昔の合宿とは規模、内容とも、大分変わったものになった。毎年、必ず何かあり、話題には事欠かないが、特に思い出というと文化班も参加した初年度の山中湖である。バスで東京を発ち宿についてから部屋割でもめてしまった。出発前に一応決めてあったが実状がちがっていた。ラグビー班、卓球班、柔道班、ブラスバンド班、弦楽班が同じ宿だったのである。何とか部屋割をすませ昼食後から練習に入る。次に夕食前の入浴でまたもめた。ラグビー班が汚れたまま帰って来て入浴したからである。他の班より苦情が出たのである。翌日の昼食後にまた事がおきた。激しい練習をし、昼食後昼寝をしていたラグビー班がブラスバンド班の大きな練習音に突然、おそわれたのである。部屋割、入浴順等の件でもめた後だけに、この事は文化班・運動班の関係を決定的とした。

このように初年度は大変な合宿となってしまった。その後年々改良が加えられ、班相互の理解も深まり、現在はすばらしい合宿が行われている。

（理科教諭）

◀ 野球班（対京華商）　▲ ラグビー班

（昭和58年4月1日　府中球場）　（昭和56年10月　本校）

各班紹介

陸上班

現在校舎改築が行われているため校庭を思うように使えず以前に比べ走り込みが出来なくなった。しかし、僕達はその分筋力の増加を考えて以前より筋力トレーニングを増やした。このように、僕達は、現在の状況の中で出来る事を考えてその範囲で出来る限りの事をやり、より能率を上げるよう、班員一人一人がそれぞれ目標を掲げその目標を達成できるよう、また先輩方が築き上げたすばらしい伝統を崩さないように、班員一人一人が自覚を持ち、一つにまとまって毎日練習に励んでいる。以上が現在の陸上班の活動状況であるが今後も、今以上に練習について考え、試合でその力を十分に発揮できるよう、皆頑張っていくつもりです。

（2A　中川）

サッカー班

三年生出場最後の春期大会では、都立八潮高校を七対〇、南高を一対〇で倒し、強敵麻布高との不戦勝でブロック優勝を果たした。そして都大会では、久留米西高に惜しくも一対〇で敗れた。我々サッカー班四二名は、いま次回大会の優勝を夢み、大きな自信と希望を胸に、毎日のきつい練習に励んでいる。

合宿前の現在の練習は主に体力をつける為ダッシュ中心にやっている。しかしグランドは、校舎改築の都合で、バレーボール班や陸上班と重なり、思うように使用できないのが現状である。また夏休み中の山中湖合宿で、かなりハードな練習をするので技術とともに体力も付いて来ると思う。今年から、合宿所も新しくなり、我々も練習意欲に燃えている。

（2A　寺崎）

ラグビー班

小山台ラグビー班が誕生したのが昭和二四年。以来三四年間で、関東大会七回出場、都第三位一回という実績を残してきた。都立進学校で、切り詰められた練習時間で、ここまで小山台ありと名声をえたのは、まさに「よき伝統」と「OB」と「現役の努力」のたまものと言えよう。

さて我が班は、OBと現役のつながりが他班に抜きん出て密であるのが大きな特徴である。毎年OBのレセプションやOB戦などを催しているのもその表われの一つである。

そして、大のラグビー好きである私たちは、そのラグビーを通して信頼と根性とフェアのいわゆる小山台精神を学んでゆくつもりである。

（2G　寺坂）

野球班

我々野球班は、週四回、しかも一日二時間弱といった限られた時間内で、密度の濃い練